

## 本シンポジウムの趣旨説明

荒川 歩  
(名古屋大学)

こんにちは。てんむすフィールド研究会を松本さんと共同で主宰している名古屋大学の荒川と申します。最初に私の方から、このてんむすフィールド研究会の主旨と、本企画の主旨を説明させていただきます。

### てんむすフィールド研究会とは

てんむすフィールド研究会は、最初に申しましたように、何人かの人的ご協力を得ながら、松本さんと荒川で主宰している研究会です。これまで3回の研究会を主催してきました。第1回が、2006年9月30日に開催した「私のフィールドワーク：転がり続ける渦中からのながめ」(登壇者：松嶋秀明・大倉得史・松本光太郎・徳田治子)、第2回が、2007年3月3日に開催した「心理学における質的研究と科学～その包摂と境界」(登壇者：村上幸史・サトウタツヤ・松本光太郎・伊勢田哲治)、そして第3回が、2008年9月7日に開催した「鯨岡理論の現在」(鯨岡 峻・森岡正芳・大倉得史・遠藤利彦)です。今回が第4回ということになります。

この研究会の主旨は、明日の論文にすぐに役立つハウツーものではなく、普段意識することのない心理学が依って立つ方法について、時間をかけてじっくり議論することになりました。そして今回は最終回になります。最終回のテーマとして、前回の「鯨岡理論の現在」でも議論の俎上にあがった「行動主義／脱行動主義」について議論してみたいと考えました。

### 本企画の問題意識

あまり「行動主義」になじみのない方もいますし、イメージされるものが違うと議論がしにくくなりますので、最初に少し言葉の説明からしようと思います。この行動主義とは、J.B.ワトソンが提唱した言葉であると言われていています。その狭義の意味は、心理学の対象を、

それまでのように意識ではなく、外から観察できる行動(運動・生理反応など)に限定する立場ということができます。すなわち、S(刺激)-R(反応)、あるいは立場によってはS(刺激)-O(生活体)-R(反応)の関係を心理学の研究対象とする立場と言えると思います。広義の行動主義として、上記に加えて、言語報告のようなものも外から観察できるものとして研究対象とできると考える立場もあります。

今回の企画は、この行動主義が現在の心理学においても、潜在的に強い影響をもっているという問題意識に端を発しています。厳密な意味での行動主義といえるのか議論があるところですが、行動主義は心理学において客観的であること、また自然科学チックな研究方法が可能であることを示しました。そのため、行動主義後の心理学の研究では「客観的でなければ科学でない」、「科学であることは好ましい」という言説がなんとなくではあるものの根深く我々の意識の中に入り込み、行動主義が心理学の精神的 The 方法論となっているように思うのです。「客観的でなければ科学でない」、「科学であることは好ましい」という言説を批判することはきわめて難しい。

この言説の何が問題かという、一つには、正しいっぽいものの危険性をあげることができると思います。「心理学は客観的・科学的でなければならない」、「客観的・科学的であることは好ましい」という言説は批判しにくいです。そして、人はしばしば批判しにくいと言うことは正しいと言うことだと考えがちですし、正しいものがあつた時、同じくらい正しい別の方法を考える想像力をなくしてしまうことへの懸念があります。批判しにくいことと正しいことは本質的に異なるはずですが、だから、ここでは「別の方法だけど、うまくいく」をちょっと考えておく必要があるように思うのです。

## 行動主義とは

さて、行動主義の問題について、少しいねいにみていこうと思います。そのために心理学の歴史を振り返ってみましょう。

行動主義が生まれたメルクマールとなったのは、John Broadus Watsonが書いた"Psychology as the Behaviorist Views It" (1913) であると言われていています。この中で、ワトソンは、**“Psychology as the behaviorist views it is a purely objective experimental branch of natural science. Its theoretical goal is the prediction and control of behavior.”**と書いています。ここから、ワトソンが、行動主義的心理学として、予測と制御をその目標とした、純粋に客観的・実験的なものとして思い描いたことが読み取れると思います。

このワトソンの行動主義は、Hull の論理的行動主義や Tolman の認知的行動主義などの形式的行動主義や、Skinner の根本的/記述的行動主義などに派生していきます。

Leahey という心理学史研究者は、行動主義のパラダイムの特徴として、末梢主義／S-R 主義、経験論、原子論、実証主義／操作主義などさまざまな特徴を挙げています(Leahey, 1980)。もう一つ、行動主義のパラダイムの特徴として、予測と制御をあげることができると思います。これは、認知心理学への橋がけとなった Tolman の考え方「心理学の究極の関心は、行動を予測し、制御することである」(Tolman, 1936) にも受け継がれて、心理学全体に広がっていきました。

また、これは、行動主義以前の心理学が、事後的説明で十分であり、予測は期待されていなかった、つまりデータに基づいて解釈可能性を示すだけでよいとされる傾向があったのとは対照的です。

### 行動主義への批判と影響

この行動主義に対して、批判的な立場の人はいました。現象学 (たとえば、Rogers)、認知心理学(たとえば、Chomsky)、ゲシュタルト心理学などです。しかし、それらは、行動主義が掲げた「科学性」を批判したわけではありません。さきほどの行動主義のパラダイムの 4 つの特徴で言えば、「末梢主義／S-R 主義」を批判したのは認知心理学／社会心理学です。

「経験論」はいわゆる遺伝研究によってある程度批判されていると言えるでしょう。「原子論」を批判した一つはゲシュタルト心理学です。しかし、実証主義／操作主義については、心理学の中にある程度受け入れられていったように思います。行動主義が元にしてきた素朴な論理実証主義モデルは既に破綻していると 1960 年代には指摘されているにも関わらず、行動主義は、あるべき心理学の理想として、操作主義や「科学主義」の理念を心理学に根付かせたのです。

質的研究ですら、その例外ではありません。質的研究でも、手続きの明示化といわれますし、グラウンデッドセオリー、K J 法など一部の方法論では手続きが一般的公式化されています。また、質的研究でも「できるだけ客観的に」と言われたりします。さらには「分析装置としての研究者」として、行動主義的なメタファーで語られたりもします。

### 本企画の目的

本企画の目的は、行動主義やその影響の全てが悪いと批判することではありません。以下の 2 つのことがしたいと考えています。

1. 行動主義が浸透する前の心理学の状況を検討し、何が失われたのかを吟味する
2. 現在の行動主義の影響を整理し、行動主義とは異なる心理学の可能性について議論する。

## 登壇者の紹介

そこで、本企画では、お三方の先生にまず話題提供をいただきます。一人目は、『心理学方法論』・『心理学論の誕生』を書かれている帯広畜産大学の渡邊芳之先生です。お二人目は、『心理学史の新しいかたち』・『心理学論の誕生』などを書かれている立命館大学のサトウタツヤ先生です。3人目は、本研究会の共同主宰者であり、質的研究をご専門にされている名古屋大学の松本光太郎さんです。このお三方の話題提供のあと、『知識の哲学』・『科学哲学の冒険—サイエンスの目的と方法をさぐる』などをお書きになられている名古屋大学の戸田山和久先生に指定討論をいただきます。

## 引用文献

- Tolman, E. C. 1936. Operational behaviorism and current trends in psychology. *Proceedings of the 29th Anniversary Celebration of the University of Southern California*, 89-103.
- Leahey, T. H. 1980/1986. (宇都木保(訳)) 心理学史 誠信書房
- Watson, J. B. 1913. Psychology as the Behaviorist Views it. *Psychological Review*, 20, 158-177.